

■第4章－概説その2■

後期難波宮の造営がひと段落した734年、四天王寺に3年に限って食封（じきふ）二百戸（こ）が施入されました。

この年、難波京内の宅地班給が行われたので、同じ頃に伽藍整備が行われたと考えられます。

この時期の伽藍整備は、金堂基壇の規模縮小、塔周辺の瓦敷整備、食堂（じきどう）の創建など大がかりなものでした。

7世紀から続く、伝統的な瓦当文様（がとうもんよう）をもった無子葉単弁十葉蓮華文軒丸瓦（むしよたんべんじゅうようれんげもんのきまるがわら）「NM3 a1」が主体的に用いられますが、補足的に、後期難波宮の造営初期に使用された蓮華文軒丸瓦「難波宮 6303」や均整唐草文軒平瓦（きんせいからくさもんのきひらがわら）「難波宮 6664 A・B」から影響を受けた軒瓦も使用されます。

また、四天王寺からは、聖武天皇の難波行幸に深く関係する軒丸瓦も出土しています。

スプーン形の間弁（かんべん）が珍しい複弁蓮華文軒丸瓦の「NM4 b」は、後期難波宮や知識寺（ちしきじ）、そして、太子町の西方院（さいほういん）で同範関係が認められます。

聖武天皇は何度も難波行幸をおこなっており、知識寺は、平城と難波を結ぶ主要ルートのほぼ中間に位置します。

知識寺は、743年の大仏造立の詔のきっかけになった廬舎那仏（るしゃなぶつ）が祀られていたともいわれており、聖武天皇とゆかりの深い寺です。

四天王寺が難波行幸と関連したことは文献には表れません。しかし、同範軒丸瓦は、聖武天皇とこれらの宮、寺をつなぐ重要な資料です。